（別紙２）

論文審査の結果の要旨

論文提出者氏名　河島茂生

本論文は、インターネット上のコミュニケーションの連鎖、ならびにこれのもたらすネット・コミュニティの成立プロセスについて、オートポイエティック・システム理論にもとづく分析を理論、実証の両面から加えたものである。論文は序章と終章をのぞき以下の四章から構成されており、これにアンケート調査の集計結果が付録として付加されている。

第１章では、生命、心理、社会の各領域におけるオートポイエティック・システムのモデルを振り返り、それがインターネット上のコミュニケーションといかなる関連をもつかを論じている。オートポイエーシス理論は元来、生物学者であるマトゥラーナやヴァレラにより生命体の本質をとらえるモデルとして構築されたが、これを社会学者ルーマンが現代社会を機能的にとらえるモデルとして発展させた。さらにこの流れを受け、生命、心理、社会を通底する情報現象をあつかう情報学的なモデルも提案されている。本論文では、これらの先行する議論を、とくにインターネット上のコミュニケーションの観点から再検討し、コミュニケーション連鎖という現象がいかにオートポイエティック・システム論的にとらえられるかを述べている。

第２章では、ベイムらによる従来のインターネット・コミュニティ論を分析し、それが何らかの価値共有にもとづくものであること、すなわち、メンバーが目的や目標、関心、テーマなどを共有することでインターネット・コミュニティの秩序が形成されるという考え方にもとづくものであることを明らかにし、その上で、このような考え方の限界や問題点について考察している。また、タークルによる多重自己論とインターネット内の人格の関係についてのべ、ポストモダニズムにもとづくその議論の限界を指摘するとともに、人格に加えられる限定化作用に着目することの重要性を強調している。

第３章では、信頼や内的規範意識という心理領域の作用が、「書きこみ」という発言行為を通じ、いかにインターネットという社会領域のコミュニケーションに関わっているかを、二つのアンケート調査によって実証的に分析した。第一の調査は口コミサイト「Enjoy 愛知万博」、第二の調査はコミュニケーション・サイト「ぱどタウン」に関するものである。第一の調査から、個々の発言者の評判よりは調査場所のほうが信頼性における比重が高いことなど、種々の知見がえられた。また第二の調査からは、コミュニケーション・サイトのルールを遵守する内的規範意識が書きこみ頻度をむしろ減じる効果をもつ、といった興味深い知見がえられた。これらは、信頼や内的規範意識という心的システムの特性と、口コミサイトへの書きこみという社会システムの作動とのあいだの関連性、限定化作用をしめす実例といえる。

第４章では、技術的な限定化作用のもつ影響についてのべている。すなわち、書きこみにおける利用者登録やウェブ・パーソナライゼーション（個々のユーザが自分の好みに応じてウェブのサイトをカスタマイズすること）といったインターネットの技術的な機能が、コミュニケーション連鎖にあたえる影響を実証的に分析している。まず、ストーリーキューブというウェブ絵本の交流サイトについて、利用者登録機能の有無に着目して分析調査をおこなった結果、利用者登録なしにすると、サイト全体の書きこみ数が増加するとは限らないが、ユーザ中の書きこみメンバーの比率は高まる、などといった知見がえられた。ついで、MuZicJam という音楽作品共同制作サイトについて、ユーザの利用行動を調査した。この結果、ウェブ・パーソナライゼーションを行うことによって、当サイトのページ・アクセス数自体はむしろ減少するものの、アクセス対象のクラスター化が生じ、幾つかの小さなまとまりの中で緊密なコミュニケーションが行われる、といった傾向がみられた。

従来、インターネット上のコミュニケーションのまとまりについては、主にいわゆるネット・コミュニティ論のなかで論じられてきた。そこでは、ユーザすなわち当コミュニティへの参加メンバーが共通の価値をもっていること、すなわち、関心、目的、テーマなどを共有していることが前提とされてきた。これはかなり妥当性のある議論であるが、コミュニケーションの局所的連結や動的様相は対象外となり、必ずしもこれだけでインターネット上のコミュニケーション連鎖という現象をすべて覆いつくすことはできない。本論文は、オートポイエティック・システム理論の諸概念をふまえ、コミュニケーション連鎖をもたらすシステム的な限定化作用に着目して、この問題の分析に新しい角度から取り組んだものである。これは挑戦的な試みであり、とくに理論的な検討のみならず実証的な調査をもおこなって、インターネット上のコミュニケーション連鎖という現象を分析し、興味深い知見をえた点は高く評価できる。むろん、えられた知見そのものは未だ体系的なものとは言い難く、今後ひきつづき検討をつづけ議論を深化させていくことが望ましい。とはいえ、本論文はインターネット上のコミュニケーションの分析についてきわめて斬新なアプローチを試みたものであり、その意味で現代情報社会に関する学術的議論において十分な貢献を果たすと考えられる。よって本審査委員会は、本論文が博士（学際情報学）の学位に相当するものと判断する。